第3章　田代学区の歴史的建造物の実態

3－1　調査の概要

(1)　調査対象選定の考え方

今回の調査では、学区内の「歴史的建造物」の中でも下記に該当する建造物について調査を行いました。

◆田代学区の歴史的景観とかかわりの深い建物
◆今までに地域行事等への参加または協力を得ており、今回の調査で連絡が取れ、協力が得られた社寺建築
◆今回の調査で連絡が取れ、協力が得られた住宅建築

また、今後も田代学区の歴史的建造物に関する調査を行う場合は、今回選定した以外の建物についても調査を行います。

なお、田代学区の代表的な歴史的建造物として揚輝荘が挙げられますが、現在は名古屋市に寄贈され、維持管理及び保存活用の検討等を既に行っているため、今回は調査の対象から除き、参考という形で本報告書に掲載しました。

(2)　調査対象と現地調査実施日

下記の建造物について、平成２２年１２月７日（火）から平成２３年１月２１日（金）にかけて調査を行いました。

建物名		現地調査日				
		１２月			１月	
（１）	昭和塾堂			◎12/22		
（２）	東山給水塔			◎12/28		
（３）	相応寺	◎12/7				
（４）	善篤寺	◎12/9				
（５）	正法寺			◎12/24		
（６）	城山八幡宮			◎12/20		
（７）	松林寺	◎12/8				
（８）	日泰寺		◎12/14			
（９）	丸山神明社		◎12/16			
（１０）	野口邸					1/21◎
（１１）	西原邸					◎1/11

(3)　調査方法

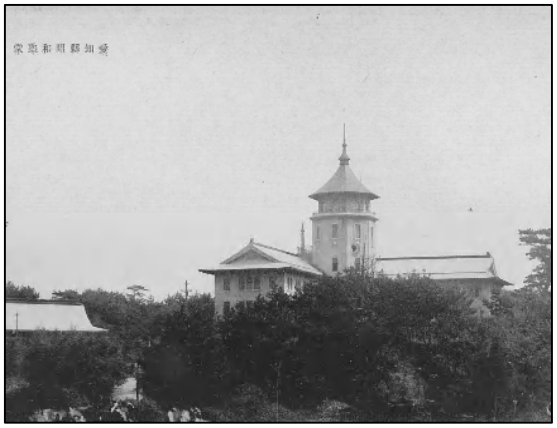
市民メンバー、市職員及びコンサルタントで下記について現地調査を行い、建造物ごとに「建造物概要」「沿革」「特徴」「現況」について整理しました。

現地調査については、文献・既存資料等を踏まえた上で、建造物の概要・現況、イベント等の実施状況、今後の意向等について所有者へのヒアリングと可能な範囲で建物・敷地の概略目視調査及び写真の撮影等により現況把握を行いました。

なお、3－2 の各施設の配置図は平成 17 年度作成の都市計画基本図を使用しています。

3－2 各対象建造物調査

(1)　昭和塾堂



①建造物概要

名称：昭和塾堂　　所在地：名古屋市千種区城山町 2-90　　所有者：城山八幡宮

建造年：昭和３年

②沿革

大正 15 年(1926)	愛知県議会にて昭和塾堂の建設について予算案可決
昭和３年(1928)	昭和塾堂を建築（昭和４年、落成式を盛大に行う）
昭和１８年(1943)	旧日本軍による接収
昭和４１年(1966)	千種区役所仮庁舎として使用（同４５年まで）
昭和４２年(1967)	県より城山八幡宮へ払下げ
昭和４５年(1970)	愛知学院大学歯学部が大学院棟として使用開始

③特徴

- 昭和塾堂は、青年向けの社会教育施設として愛知県によって建築されました。
- 昭和塾堂（当時名称は教化殿堂）の建設については、財政難を理由に反対の意見もあり、寄付金を募るという条件付で、愛知県議会にて予算案が可決されました。
- 建設費１６万円のうち４万円が寄付金でまかなわれました。
- 昭和塾堂の建設にあたり、昭和２年９月から 11 月にかけて延べ 778 人、翌年１０月から１１月にかけては延べ３０３人の青年団員が建設用地の整備、道路建設、植樹などの勤労奉仕を行われました。
- 設計は愛知県営繕課によるもので、酒井勝の下に安藤武郎が主任となり、黒川巳喜（意匠図）、尾鍋邦彦（構造図）らが担当しました。
- 四層の高塔は八角集中堂を模し、望楼(ぼうろう)風になっており、地域のランドマークとなっています。塔を中心に鴟尾(しび)を付けた入母屋(いりもや)屋根二層の翼棟が、三方に広がり「人」を表しています。
- 養心殿は、昭和６年(1931)に昭和塾堂の付属体育殿として建築されました。

④現況

- 屋根や外壁については劣化が進み、錆や剥離が見られ、雨天時の風向きによっては雨漏りがあるとのことです。一部床は簡易な補強がされています。
- 現在は、愛知学院大学歯学部が大学院棟として城山八幡宮から賃借しています。
- 地域行事では、平成８年及び１０年に開催した名古屋市「まるはちの日」記念行事『⑧寺⑧坂めぐり』で史跡散策コースとして駐車場の敷地を提供されました。

・平成２２年１１月には地域委員会提案事業のひとつ「鎮守の森自然観察会」のスタンプラリーや体験会の会場として駐車場の敷地を提供されました。
・地域の行事の場とすること等について、建物内部は使用中であることと、安全性の点から難しいとのことです。

⑤参考

昭和塾堂の建設過程とその建築的特徴を明らかにすることを目的として名古屋大学西澤研究室により作成された「木戸広太、西澤泰彦　『昭和塾堂の建設過程とその建築的特徴に関する報告書』　2007」から昭和塾堂の建築的特徴について一部抜粋します。

５－２　昭和塾堂の建築的特徴

施主である愛知県が、建築的に望んだこととして、青年教育としてふさわしい建築の形態と、諸室の床面積指定があったと考えられる。それに対する答えとして、設計者は、敷地形状に合わせて、左右対称で人字形の平面形状と塔をもつ建築を考えた。「人字形」平面が指摘され始めた時期と建設工事の経緯を勘案すると、必要な床面積を満たすような平面計画をした上で、敷地形状に合わせて最終的な平面形態が決められ、それに伴い、構造が決まっていったと考えられる。「人字形」平面を採用したことから、翼部と講堂部の接点となる部分で構造的な不整合が生じたが、それを解消すべく階段両側の柱を翼部と講堂部が共有するかたちで構造体をつくるという工夫や、八角形平面の塔を支える柱の位置を翼部の柱の位置に合わせる工夫がとられるという、構造に関する建築的特徴が多く見られ当時の技術者の苦労のあとが伺える。さらに特筆すべきことは、講堂部の柱梁に鉄骨が使用してあると考えられるので、その場合、昭和塾堂は、鉄骨鉄筋コンクリートと鉄筋コンクリートの混構造であるということである。

また、様式について和風と洋風の意匠が混在するため断定しづらいが、当時の他の建築、通説として帝冠様式の代表例である名古屋市役所庁舎、愛知県庁舎、軍人会館（現・九段会館）などと比較した場合、昭和塾堂を帝冠様式に分類するのは無理があり、洋風建築に和風建築の意匠を重ね合わせて調整を図るという折衷様式に位置づけられる。また特に塔部において、意匠的に力が入れられており、その意匠的に重要な位置であるもち送りの部分では、そのデザインを実規するための技術の工夫が見られた。

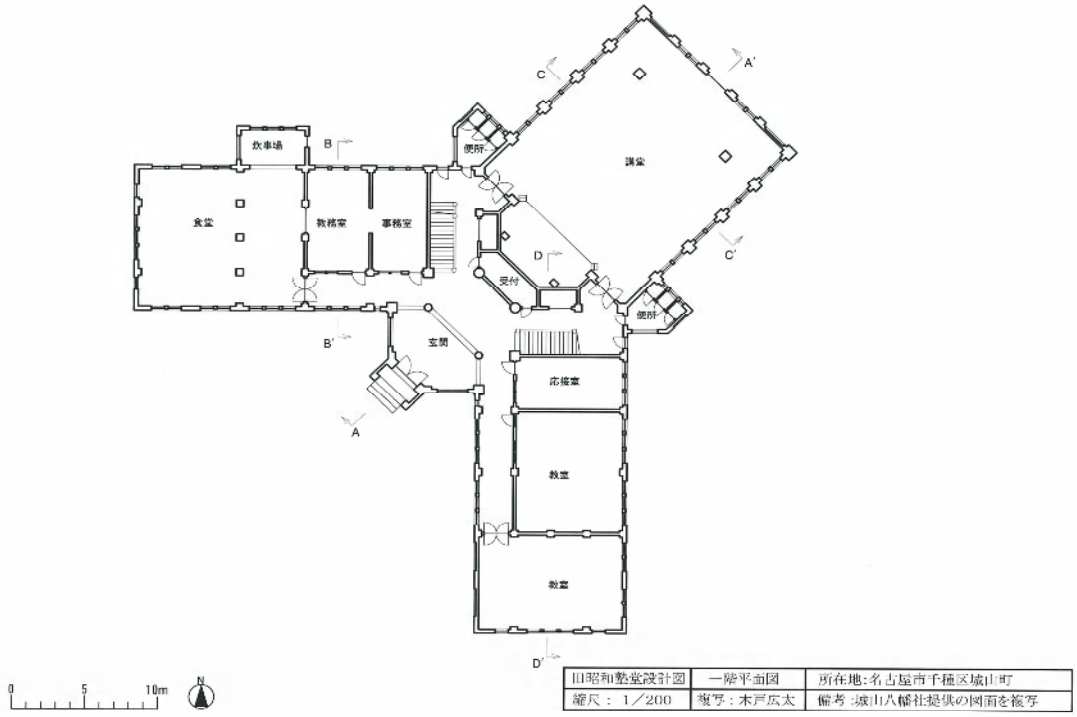


図6　一階平面図

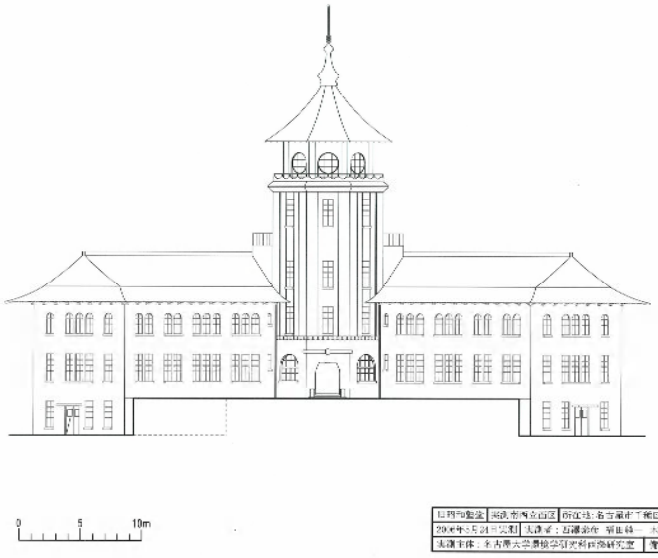


図11　実測立面図

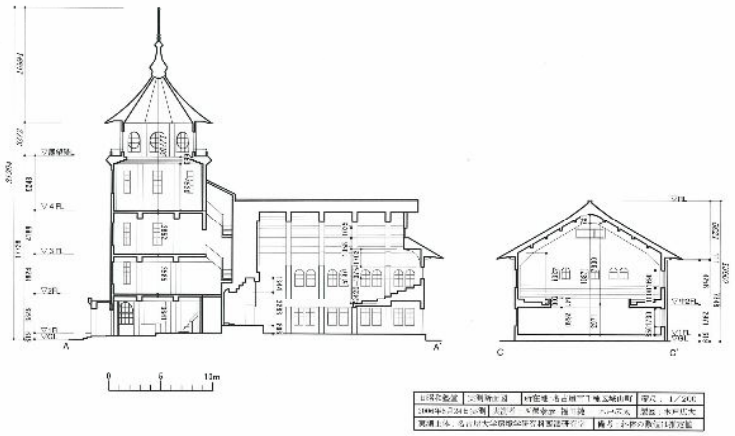


図18　持ち送り部断面図

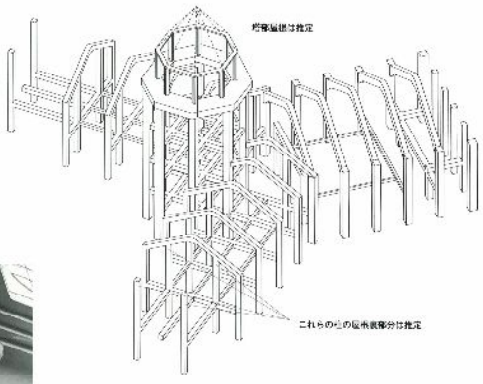


図19　軸組図（一部推定）

写真1　持ち送り部外観

写真2　持ち送り部内観

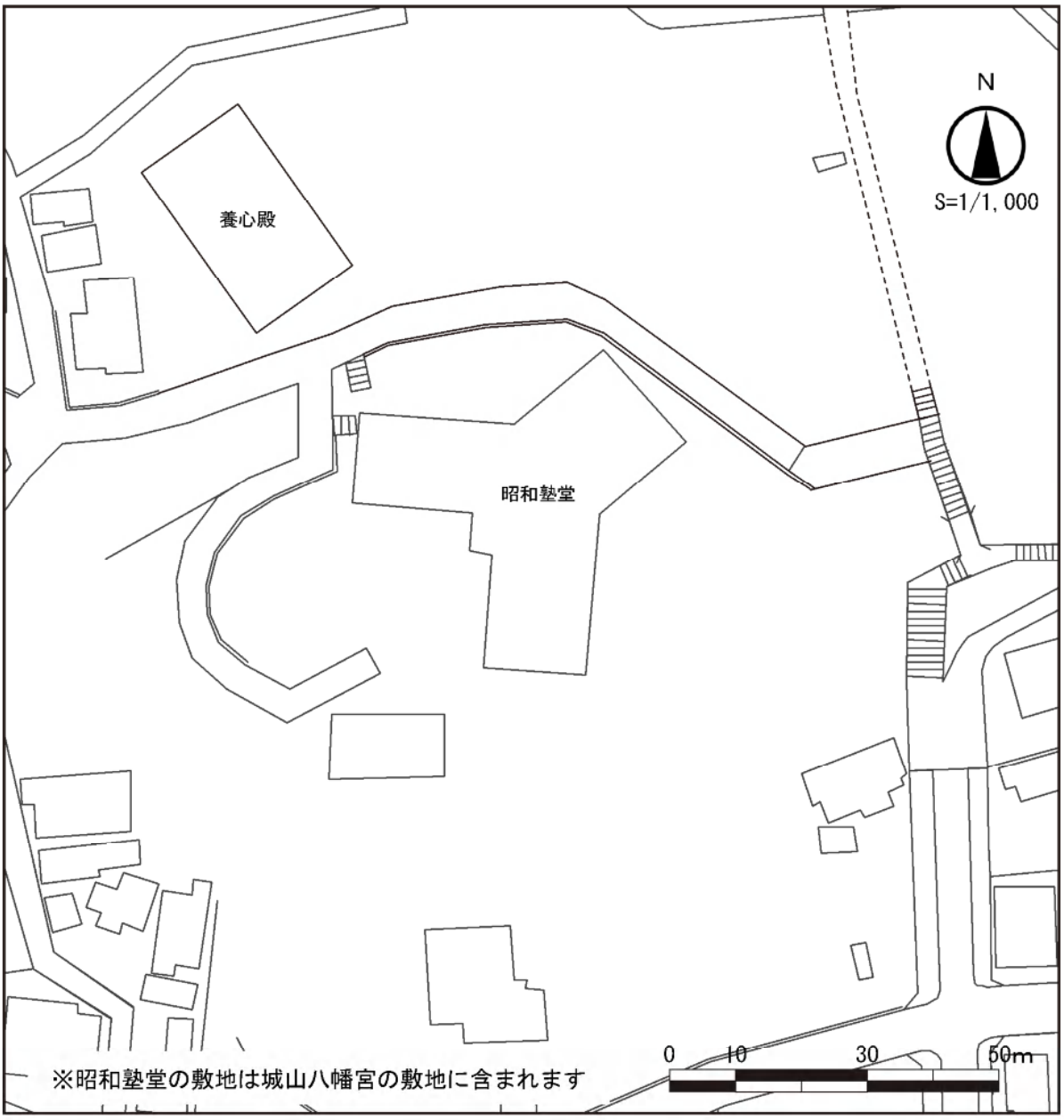
参考文献等

・木戸広太、西澤泰彦　『昭和塾堂の建設過程とその建築的特徴に関する報告書』　2007

・『千種区史』　千種区制 50 周年記念事業実行委員会　1987

・『愛知県の近代化遺産』　愛知県教育委員会　2005

・『愛知県昭和塾堂絵葉書』



塔部

塔持ち送り部

講堂

廊下

昭和塾堂内

階段

(2)　東山給水塔

①建造物概要

名称：東山給水塔　　所在地：名古屋市千種区田代町四観音道西　　所有者：名古屋市
建造年：昭和５年

②沿革

昭和５年(1930)	配水塔として建設（昭和 48 年まで利用）
昭和５４年(1979)	応急給水施設に改造、東山給水塔に改称
昭和５８年(1983)	展望用スペース、多角形屋根の設置

③特徴

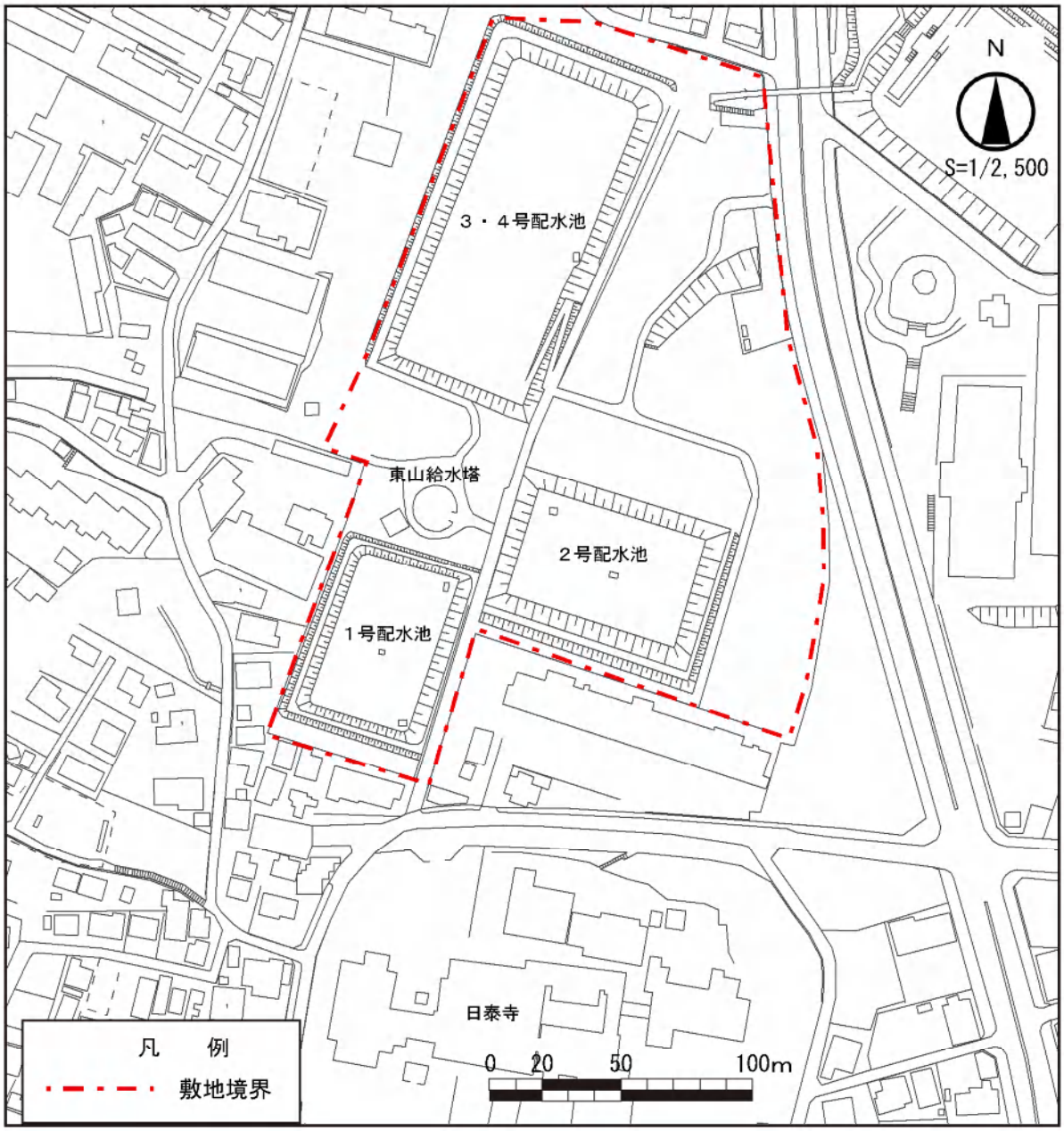
- 東山給水塔（建設当時の名称は東山配水塔）は、名古屋市の東部丘陵地帯が住宅地として急速に発展したことをうけて東山配水場構内に建設された鉄筋コンクリート造の配水塔で、千種区覚王山一帯の高台に配水するために利用されました。
- 塔の高さは 37.85m、展望台の高さは 27.00m。タンクの容量は 300 ㎥となっており、常に新しい水が貯えられています。
- 設計は、元長崎市助役で、当時名古屋市水道局職員だった成瀬薫です。
- 昭和 60 年には、厚生省（現厚生労働省）の近代水道百年企画において「近代水道百選」に選定され、平成３年には名古屋市都市景観重要建築物等にも指定されています。
- 高い位置にあり、かつ背の高いこともあって、各所から見ることのできるランドマークとなっています。

④現況

- 現在東山給水塔は、災害対策用の応急給水施設となっています。また、東山配水場は水道施設であり、水道水の安全性を確保するため常時開放は難しく、年２回の一般開放は職員を配置して実施しています。
- 耐震性はありますが、一部劣化補修を予定しています。平成２３年度以降、隣接する配水池の改修工事、配水場の修景工事等を行う予定で、それに伴い工事期間中の給水塔の年２回の一般開放（春分の日、まるはちの日（８月８日））の実施については未定となっています。
- これまでには、配水場を水道週間行事、地域行事「やまのて音楽祭」の会場等として利用されてきました。

参考文献

- 『千種区史』　千種区制 50 周年記念事業実行委員会　1987
- 『愛知県の近代化遺産』　愛知県教育委員会　2005



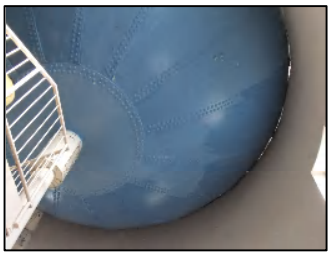
入口

３・４号貯水池

イベント時

給水塔内

給水塔内


貯水タンク

(3)　相応寺

①建造物概要

名称：宝亀山相応寺　　所在地：名古屋市千種区城山町 1-47　　所有者：相応寺
建造年：（本堂）寛永 20 年　（総門・山門・鐘楼）寛永年間

②沿革

寛永１９年(1642)	現在の名古屋市東区山口町に創建
寛永２０年(1643)	本堂が完成、駿府から駿河御殿を移築
寛永年間(1624～44)	総門・山門・鐘楼を建築
昭和９年(1934)	東区山口町から現在地に移転

③特徴

- 初代尾張藩主徳川義直が、生母である相応院殿お亀の方の菩提を弔うために相応寺を創建しました。義直自らの手で寺号を額に書き、総門、山門、本堂前に掲げられました。
- 創建時は１万２千坪の境域を定めて七堂伽藍を有し、寺領三百国が支給されました。
- 尾張歴代藩主の尊崇篤く、明治維新までは歴代の藩主とお目通りがかなう「御寺組」のうちの一ヶ寺とされていました。
- 本堂、鐘楼、山門、総門は創建当時のもので、移転時に移築されています。
- 本堂は、間口十二間、奥行十間半、入母屋造桟瓦葺で、前面に唐破風をあげた向拝（こうはい）がつきます。内部には、江戸時代初期の特徴を持つ欄間などの見事な彫刻が見られます。
- 総門は、城門などにも用いる重厚な薬医門で、両脇に板壁や潜り戸がついて、正面三間の切妻造本瓦葺となっています。
- 山門は、三間一戸八脚門（やつあしもん）、軒唐破風（からはふ）付き、入母屋造（いりもやづくり）桟瓦葺となっています。
- 鐘楼は、二階建、下見板張りの袴腰付きで、屋根は入母屋造桟瓦葺となっています。
- 駿河御殿は、狩野派による襖絵を多く有していた２００坪の書院で、移転時に移築されましたが、戦災により現存していません。
- 境内には、中京の茶人・堀田宗達ゆかりの茶筅塚（ちゃせんづか）があります。
- 移転時、京都の清水寺を模して本堂前の境内に舞台が造られましたが、戦争や伊勢湾台風時の被害等もあり、現在は石垣になっています。

④現況

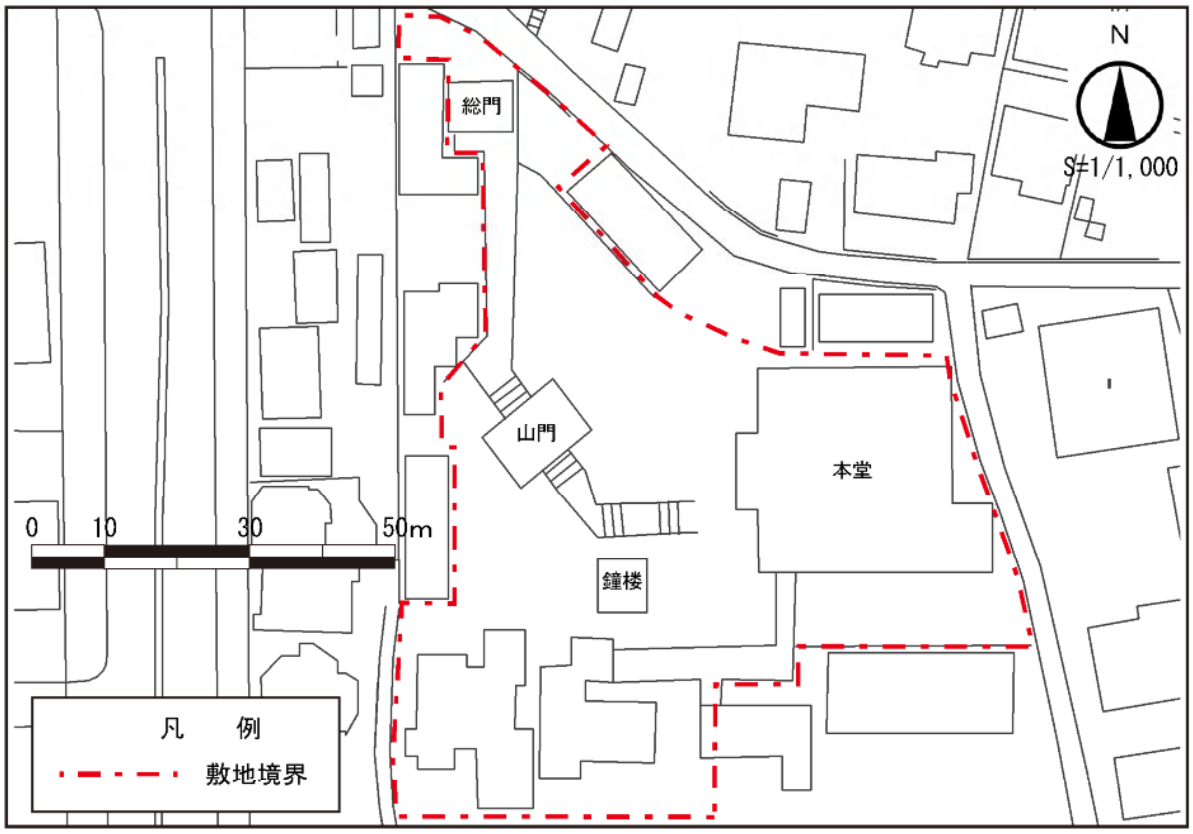
- 本堂や総門等は移築して８０年近く経ち、同時期に移築したものであるため、修繕を要する箇所がここ数年で一度に現れています。現状では最低限の応急処置によりまかなっており、山門の屋根の一部をトタン張りで仮補修しているほか、本堂では一部の梁に補強を施しています。

今後、どう建物を維持していくかについては模索中とのことです。

- 寺を地域の方に広く知ってもらうため「相応寺サロン」を主催しています。これまでには、びわ、サックス、バイオリン、琴等のコンサートが本堂で行われました。年２回程度行われ、毎回１００～１３０人程度が訪れます。なお、相応寺サロンの準備については人手が必要ですが、現状は住職と関係者数名だけで行っているため、ボランティアで手伝っていただけるような人がいれば助かるとのことです。
- 日本で最初に始めたという茶筅供養を行っています。
- その他、史跡散策やお茶席（茶筅塚）巡り、スタンプラリーの会場として境内を提供されました。今後も地域の行事や、小学校の総合学習の場とさせていただくこと等について検討していただけるとのことです。

参考文献

- 「宝亀山相応寺」　http://www.sououji.com/　（最終アクセス　2011年3月7日）
- 『名古屋の史跡と文化財（新訂版）』　名古屋市教育委員会　1990



総門

本堂外観

鐘楼外観

本堂内

茶筅塚

本堂前から見た山門

(4)　善篤寺

①建造物概要

名称：霊松山善篤寺　　所在地：名古屋市千種区城山町 1-72-4　　所有者：善篤寺

建造年：（本堂）昭和５６年　（山門）江戸時代建立と伝わる

②沿革

応永年間(1394～1428)	菩提寺という名で竹ヶ鼻村（現在の岐阜県羽島市）にて創建
慶長１５年(1610)	清須城下への移転を経て（その時善篤寺に改称）、清須越しにより現在の名古屋市中区門前町に移転
安永５年(1776)	本堂より出火し、山門を除いて全焼（再建時期は不明）
昭和１６年(1941)	中区門前町から昭和１３年から同１６年にかけて現在地に移転
昭和５５年(1980)	老朽化していた本堂を新築

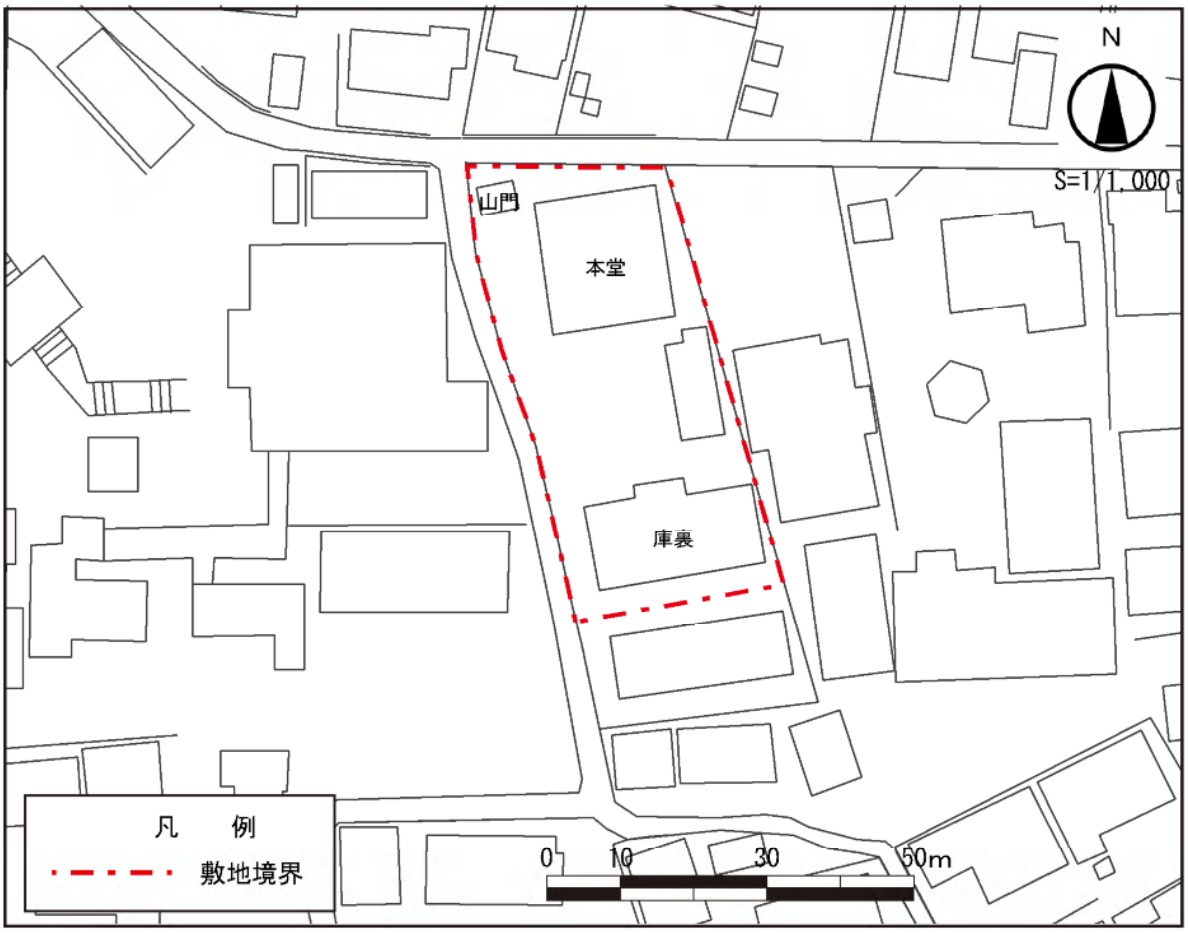
③特徴

・清須越しを経たお寺です。
・本堂以外は現在地への移築以前のものです。（山門、庫裏）
・山門は、四脚門で、桟瓦葺となっています。
・以前の本堂は現在のものより大きく、使われていた鬼瓦等が今も保管されています。
・門前町にあった頃は、万松寺・大光寺とともに府下の三刹といわれました。

④現況

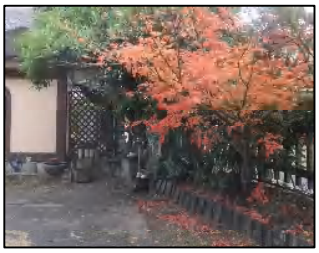
・古くから残っている山門については、一部柱梁が劣化し、屋根に傷みがみられます。
・現在本堂は法事等のお寺本来の用途で使用されていますが、「やまのて音楽祭」などのコンサート会場としても使用させていただいています。
・平成２２年１１月には地域委員会提案事業のひとつ「鎮守の森自然観察会」のスタンプラリーの会場として境内を提供されました。
・先々代の住職から行っていた禅文化学院を再開することを現在検討しており、このような取組みによって地域に開かれた、地域とのつながりのあるお寺としていきたいとのことです。
・お寺とは「ものの考え方」を広めていく場所であり、その意義に則するような内容であれば、今後も地域の行事や、小学校の総合学習の場とすること等について検討していただけるとのことです。

参考文献
・『千種区史』　千種区制 50 周年記念事業実行委員会　1987
・『名古屋の史跡と文化財（新訂版）』　名古屋市教育委員会　1990



本堂外観

門～本堂の道


境内の紅葉

本堂内

本堂内

旧本堂の部材

(5)　正法寺

①建造物概要

名称：黄梅山正法寺　　所在地：名古屋市千種区城山町 1-80 番地　　所有者：正法寺

建造年：（僧堂）昭和 26 年　（鐘楼堂）昭和２８年　（山門）昭和４８年

（衆寮）昭和５７年　（写経塔）昭和５８年　（開山堂）平成１４年

②沿革

明治３６年(1903)	東春日井郡高蔵寺村において「私立尼僧学林」創建
明治４２年(1909)	名古屋市北区柳原町へ学林移転
昭和１２年(1937)	正法寺創建（現在地）
昭和２０年(1945)	空襲で学林の講堂・校舎・寄宿舎が焼失
昭和２２年(1947)	正法寺境内に学林再建（寄宿舎・校舎落成）
昭和２３年(1948)	「第一尼学林」から「曹洞宗高等尼学林」に改称
昭和２６年(1951)	僧堂が完成、愛知専門尼僧堂設立（同４５年には特別尼僧堂設置）
昭和２８年(1953)	同３８年までの間に、書院・校舎等を増築・改修、鐘楼堂を新築等
昭和４８年(1973)	本堂・僧堂を大改修、山門を新築
昭和５７年(1982)	衆寮の新築、同５８年写経塔を建築
平成１４年(2002)	本堂の大改修、開山堂を新築

③特徴

- 日本でも数少ない尼僧堂（にそうどう）のひとつです。
- 本堂、僧堂、鐘楼堂、写経塔等があります。建造物自体は戦後に建てられたものが多く、最も古い建造物としては昭和 26 年に建てられた僧堂が挙げられます。
- 山門横の瓦塀は、平成１４年に葺き替えた昔の本堂の瓦を使用しています。

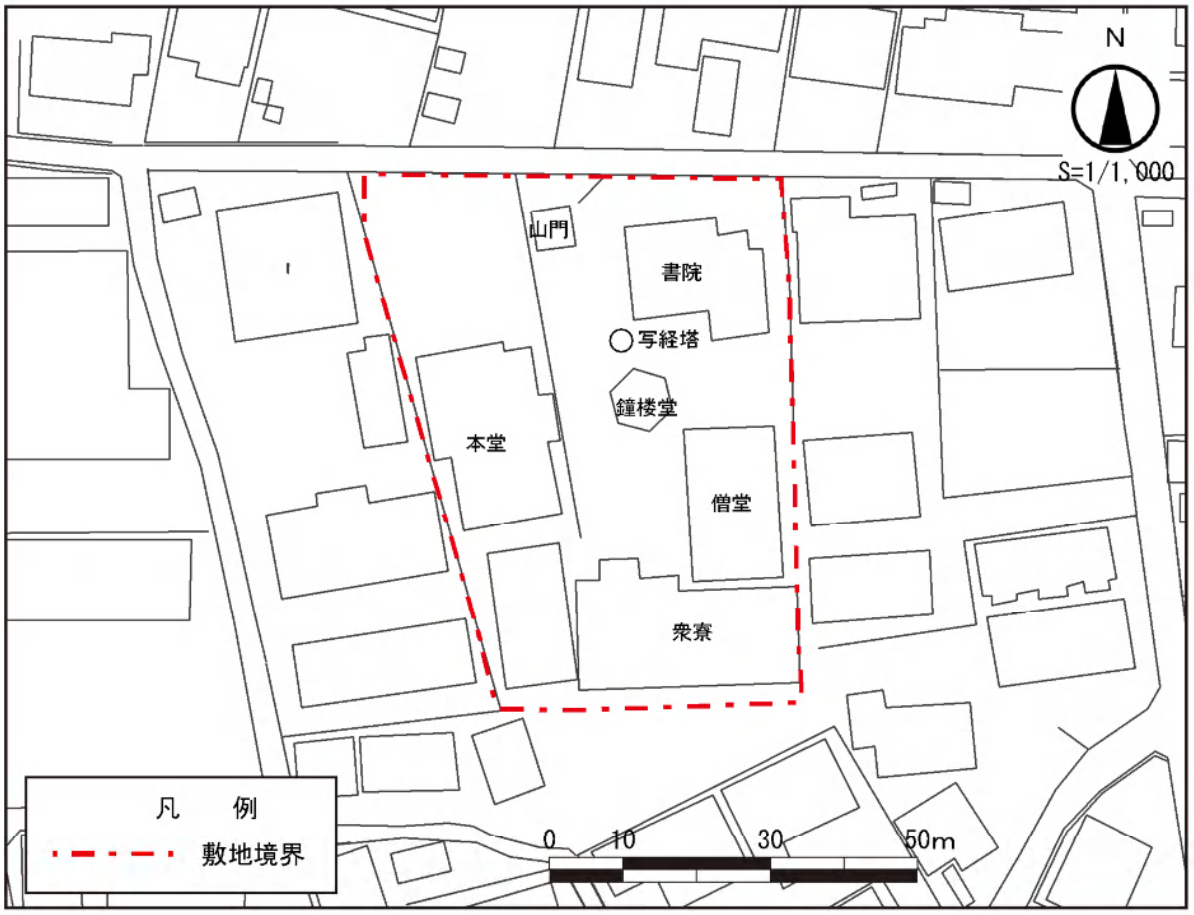
④現況

- 正法寺では、年間を通して「涅槃会（ねはんえ）攝心（せっしん）」「月例攝心」といった多くの行事が行われています。一般の方が参加可能なものに「日曜参禅会」と「地蔵流し」があります。日曜参禅会は月に１回行われ毎回６０～７０人が参加、地蔵流しについては毎年５００人ほどが参加します。
- その他に地域行事の「やまのて音楽祭」等の会場として境内を提供されました。
- 年間行事は約１～２年前に予定が決まっており、地域の行事等で会場とさせていただくことを検討する場合は、早い時点で打診する必要があります。

・本来は修行道場であるといった認識が必要ですが、禅を通して「生きること」を学ぶ場として地域に根付いている寺院であり、今後も地域の行事の場とすること等について検討していただけるとのことです。

参考文献

・『叢林百年のあゆみ』　特別尼僧堂／愛知専門尼僧堂　2003



本堂内

本堂内

僧堂内

塀

山門

鐘楼堂

(6)　城山八幡宮

①建造物概要

名称：城山八幡宮　　所在地：名古屋市千種区城山町 2-88　　所有者：城山八幡宮
建造年：（本殿・拝殿）昭和１１年　（洗心軒）明治２５年頃　（養心殿）昭和６年

②沿革

明治 41 年(1908)	現在の名古屋市千種区春里町にあった八幡社に浅間社、山神社、一ノ御前社、白山社を合併合祀
昭和６年(1931)	愛知県が養心殿を建築
昭和１１年(1936)	千種区春里町から現在地に八幡社移転、本殿・拝殿を建築
昭和３１年(1956)	城山八幡宮と改称
昭和４３年(1968)	名古屋市中区竪三蔵町から現在地に洗心軒移築

③特徴

- 境内は、織田信長の父である信秀によって天文 17 年(1548) に築城された末森城の址で、二重の空堀が今も残っています。現在は、本殿、洗心軒、養心殿、献華殿、神楽殿、豊玉稲荷社等があります。
- 洗心軒は、名古屋の豪商師定の初代高松定一の隠居所として明治２５年(1892)頃中区竪三蔵町に建てられ、近代数寄者であった三井物産初代社長の益田孝（鈍翁（どんのう））が関東大震災後に一時期滞在した茶室を現在地に移築したものです。松尾流の設計と伝わっています。現在は西側に一部２階建と東側に平屋があります。屋根は２階が寄棟で、切妻や片流れが複雑に附属します。
- 養心殿は、愛知県により昭和６年(1931)に昭和塾堂の付属体育殿として建築されました。
- 本殿の裏手には連理木と呼ばれるアベマキの古木があり、縁結び、良縁祈願、夫婦円満のご神木として信仰されています。市の保存樹に指定されており、アベマキとしては市内最大といわれています。

④現況

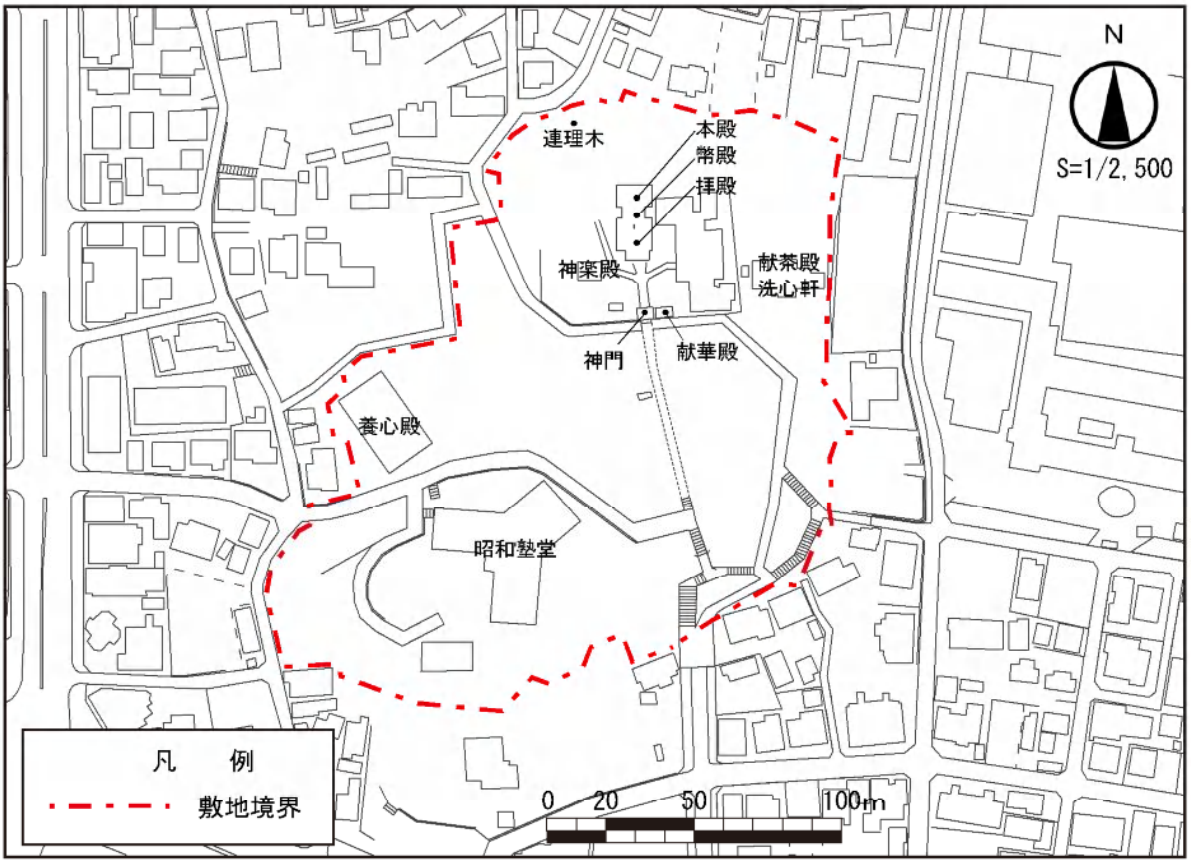
- 戦争、伊勢湾台風では建物の大きな被害はなかったとのことです。
- 移転６０周年の記念事業では幣殿の拡張を行い、７０周年記念事業では本殿の修繕を行っています。
- 定期的に境内の掃除・樹木の剪定を行っていますが、敷地面積が広く人手が足りない状況です。
- 養心殿と洗心軒は貸出しをしており、年間契約している時間帯以外であれば予約のうえ使用することができます。
- 城山八幡宮では、「節分祭」「大祓」「茅輪神事」等の行事を実施しているほか、恋にまつわる三

社を参拝し祈願する神社めぐりである「恋の三社めぐり」を千種区内の高牟神社、晴明神社と共同実施しています。

- 地域の行事「やまのて音楽祭」ではコンサート会場として拝殿を提供されました。
- 田代小学校等の総合学習で、学区内の歴史的な場所をまわることがあり、城山八幡宮の由来等についてお話をしていただいているそうです。
- 今後も地域の行事の場とすること等については検討していただけるとのことです。

参考文献

- 「城山八幡宮」　http://www.shiroyama.or.jp/　（最終アクセス　2011年3月7日）
- 『千種区史』　千種区制 50 周年記念事業実行委員会　1987
- 『愛知県の近代和風建築』　愛知県教育委員会　2007



空堀

洗心軒内

神門

養心殿外観

養心殿内

拝殿内

(7)　松林寺

①建造物概要

名称：萬祈山松林寺　　所在地：名古屋市千種区南明町 1-43
建造年：（本堂）嘉永６年　（山門）嘉永６年頃
所有者：松林寺

②沿革

元亀２年(1571)	現在地に創建
嘉永６年(1853)	本堂を建築

③特徴

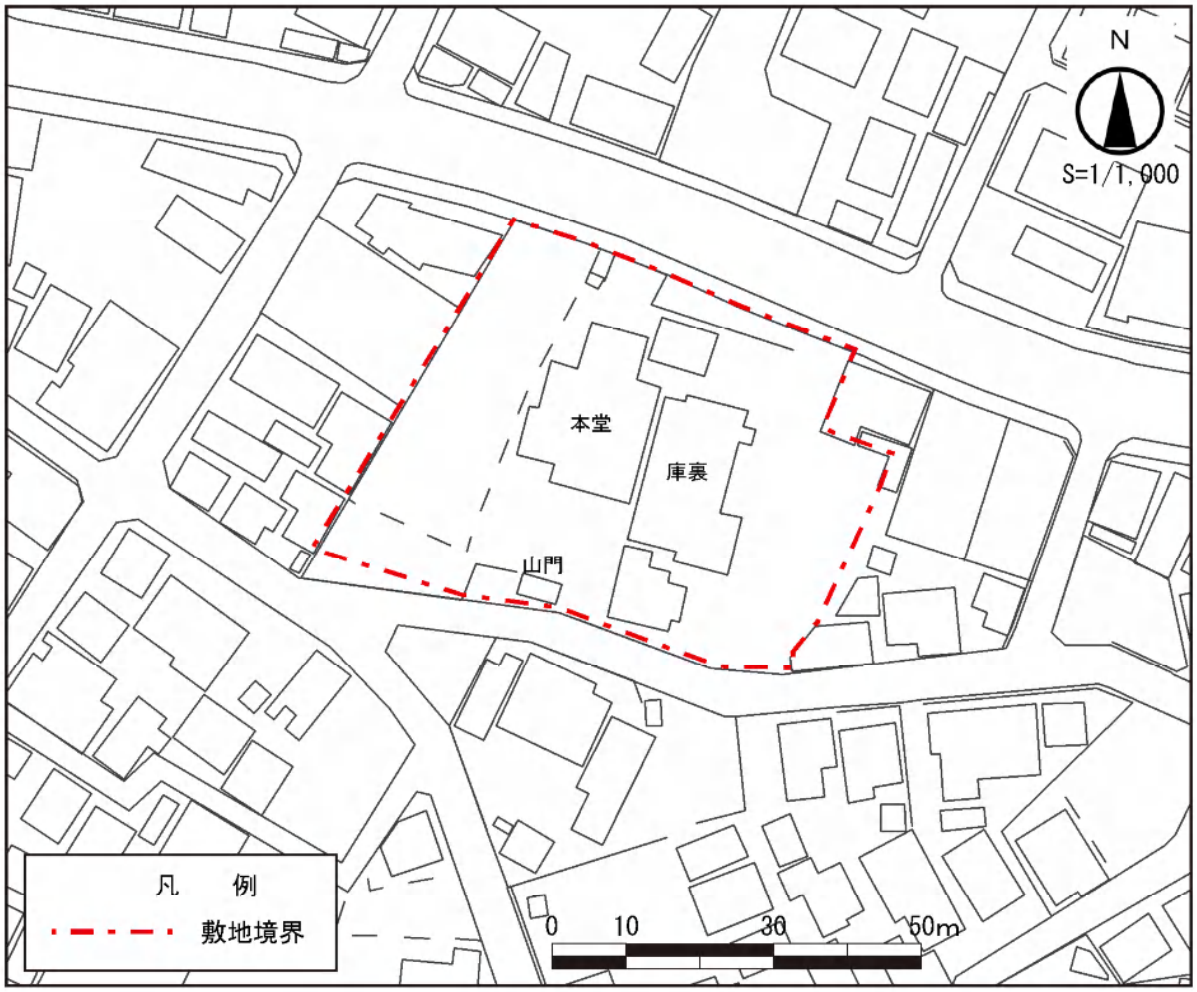
・松林寺の本堂は、現在地に建てられてから１５０年以上経っており、他地区から移築されたものを除いて千種区内で現存する最古の木造建造物といわれています。
・江戸時代丸山村にあった唯一のお寺です。
・本堂の建築当時は周辺が松林ばかりだったそうで、建材にも松が使われています。
・山門も、本堂と同じころに建てられたものではないかとのことです。
・御本尊は薬師瑠璃光如来で、創建以来のものとのことです。

④現況

・本堂の屋根は、十数年前の台風で被害を受けて改修し、あわせて軽量化しています。
・現在は特に修理が必要な箇所がありません。
・以前、６０年に１度開花するという「リュウゼツラン」が開花した時に一般公開し、多くの方がみえたそうです。
・田代小学校の総合学習で、学区内の歴史的な場所をまわることがあり、松林寺では本堂の中や本尊を案内していただいているそうです。
・平成２２年１１月には地域委員会提案事業のひとつ「鎮守の森自然観察会」のスタンプラリーの会場として門の前を使用させていただきました。
・お参りに来る方がいたり、特に毎週土曜・日曜については法要等が行われたりするため、地域の行事等で敷地内を会場として使用させていただくことは難しいそうですが、例えば平日などで条件があえば検討していだだけるとのことです。

参考文献

・『千種区史』　千種区制 50 周年記念事業実行委員会　1987



玄関

庫裏内

欄間

本堂内

庭（枯山水）

瓦

(8)　日泰寺

①建造物概要

名称：覚王山日泰寺　　所在地：名古屋市千種区法王町 1-1　　所有者：日泰寺
建造年：（鳳凰台）昭和２年　（本堂）昭和５９年　（草結庵）天明年間　（奉安塔）大正７年

②沿革

明治３７年(1904)	日暹寺の創建
大正７年(1918)	奉安塔を建設
昭和２年(1927)	鳳凰台を建築
昭和１７年(1942)	日暹寺から日泰寺に改称
昭和３７年(1962)	名古屋市中区の長栄寺から草結庵を現在地に移築
昭和３７年(1962)	仮本堂を建築
昭和５９年(1984)	本堂を建築

③特徴

- インドで発掘された仏舎利（釈迦の遺骨）を、タイ（当時シャム）の国王から分与され、それを奉安するために釈尊を表す「覚王」を山号とし、日本で唯一いずれの宗派にも属さない単立寺院として創建されました。なお、山号の「覚王」は釈迦を表しています。
- 創建当初は日暹寺（にっせんじ）といいましたが、昭和 14 年にシャムからタイへの国名変更に伴い、同１７年に日泰寺に改称されました。
- 仏舎利を祀る奉安塔は日本建築史学の基礎を築いた伊東忠太による設計で、ガンダーラ式といわれており、愛知県指定文化財に指定されています。
- 草結庵は中区の長栄寺に建てられた茶室で、切妻造、一方寄棟造、こけら葺、三畳台目、相伴（しょうばん）席付きの茶室で、同庵の壁は、名古屋における刷毛塗（はけぬり）壁の最初といわれており、愛知県指定文化財に指定されています。
- 棟札によると、鳳凰台の大工棟梁は魚津工務店の魚津弘吉、床の間などの意匠構成には名古屋の茶匠吉田紹清が関わったとされています。鳳凰台は名古屋市指定文化財に指定されています。
- 鳳凰台は桁行 10 間半（実長１８間半）、梁間４間（実長７間）、入母屋造、桟瓦葺の大書院です。これまでの大書院の大空間の連続性に加えて、中廊下を組み合わせることで、大中小の規模の異なる座敷を必要に応じて自由に使える独立性を確保しており、近代の大書院の新しい可能性を示したものといえます。

④現況

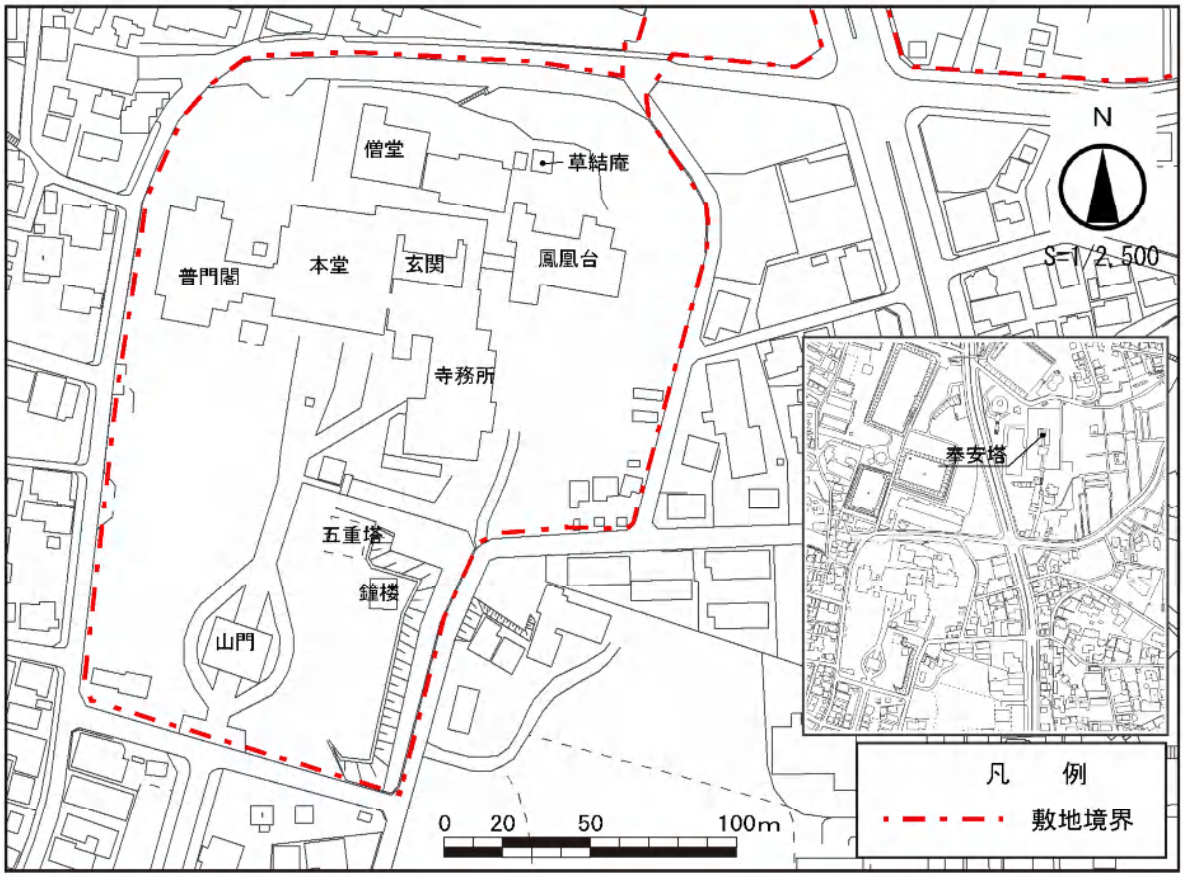
- 日泰寺の行事「成道会（じょうどえ）」のほか、境内を提供している「ウエサカ祭」、「弘法さん

の縁日（毎月 21 日に開催）」等年間で数多くの行事が行われます。

- 地域の行事では、町内会・商店街主催の「盆踊り」の他、「朝のラジオ体操」等昔から続いているものがあり、小学校の総合学習では、本堂、奉安塔の案内をされているそうです。
- 地域の行事「やまのて音楽祭」ではかつて鳳凰台をコンサート会場として提供されたこともあります。
- 今後も地域の行事の場とすること等については検討していただけるとのことです。

参考文献

- 『名古屋の史跡と文化財（新訂版）』　名古屋市教育委員会　1990
- 『千種区史』　千種区制 50 周年記念事業実行委員会　1987
- 『愛知県の近代和風建築』　愛知県教育委員会　2007



山門

五重塔

本堂

鳳凰台内

草結庵

縁日

(9)　丸山神明社

①建造物概要

名称：丸山神明社　　所在地：名古屋市千種区丸山町 1-38　　所有者：丸山神明社
建造年：（本殿）昭和２０年　（社務所等）昭和２９年頃　（常夜灯）天保５年

②沿革

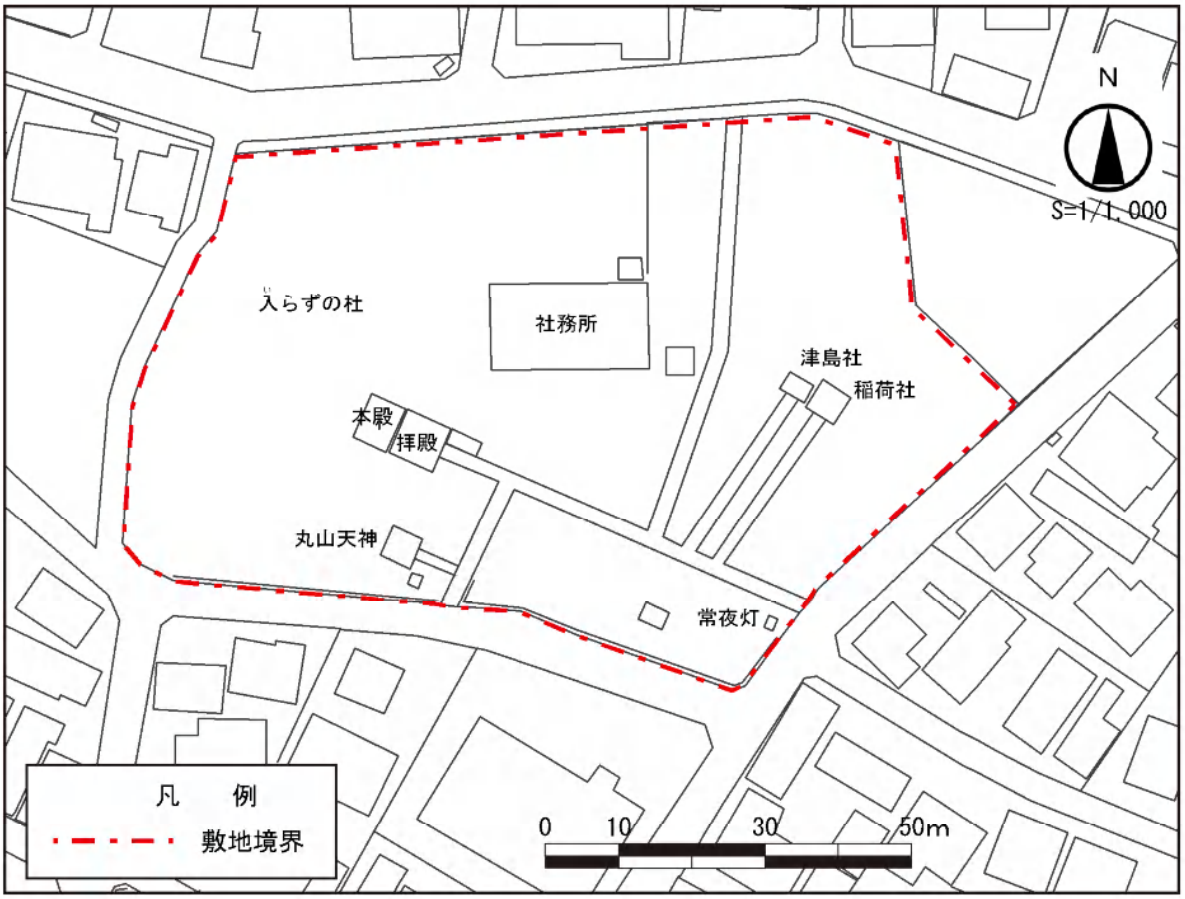
承久３年(1221)以前	地域の村人たちがつくった村社がはじまりといわれる
天保５年(1834))	常夜灯を設置
昭和２０年(1945)	現在の本殿を建築
昭和２９年(1954)	この頃、本殿以外の建物を建築
昭和３４年(1959)	伊勢湾台風で森の多くの木に被害（建物には被害なし）

③特徴

- 覚王山丘陵の南西端にある高台に立地しています。
- 『丸山地誌写真集』（編集：水野晴一、発行：1978 年）によると、昭和１２年頃の神社境内実測配置図が載っており、その当時には拝殿や社務所が建てられていました。
- 南を向いて建つ社が多い中、丸山神明社は東を向いており、これは参拝者が伊勢神宮を向くようにという意味と、東側からの守りという意味があるそうです。
- 境内の東側は笠寺観音と竜泉寺を結ぶ四観音道に接しており、またその道をかつて照らしていた常夜灯（天保５年(1834)のもの）が今も残っています。
- かつて、境内には旅人の休み処、茶屋もあり、近隣には宿坊もあったとのことです。
- 現在森にある木の多くは、伊勢湾台風の後に地域の方によって新しく植樹されたものです。
- 森には保存樹があり、敷地は特別緑地保全地区にも指定されています。この森は、地域にとって貴重な緑となっています。隣接する丸山公園は、以前は境内の一部でした。
- 鳥居の様式は神明鳥居と呼ばれるものです。

④現況

- 尾張の虎といわれた織田信秀(織田信長の父)ゆかりの場所で、必勝祈願のために参拝される方もいるそうです。
- 現在、境内で毎月１と６日のつく日に開催される丸山神社青空市（朝市）は、安土桃山時代に始まった後一度途絶え、昭和４５年に復活したものです。
- 境内では子ども会の行事「森に親しむ会」が行われるなど、地域活動を通して神社と住民のつながりがあることがうかがえます。



鳥居

津島社

社務所

常夜灯

入らずの杜

稲荷社

(10)　野口邸

①建造物概要

名称：野口邸　　所在地：千種区田代町四観音道西 15-3　　所有者：野口氏

建造年：大正 10 年

※敷地内には２棟の住宅（旧宅、新宅）があり、本調査では旧宅を対象としています。

②沿革

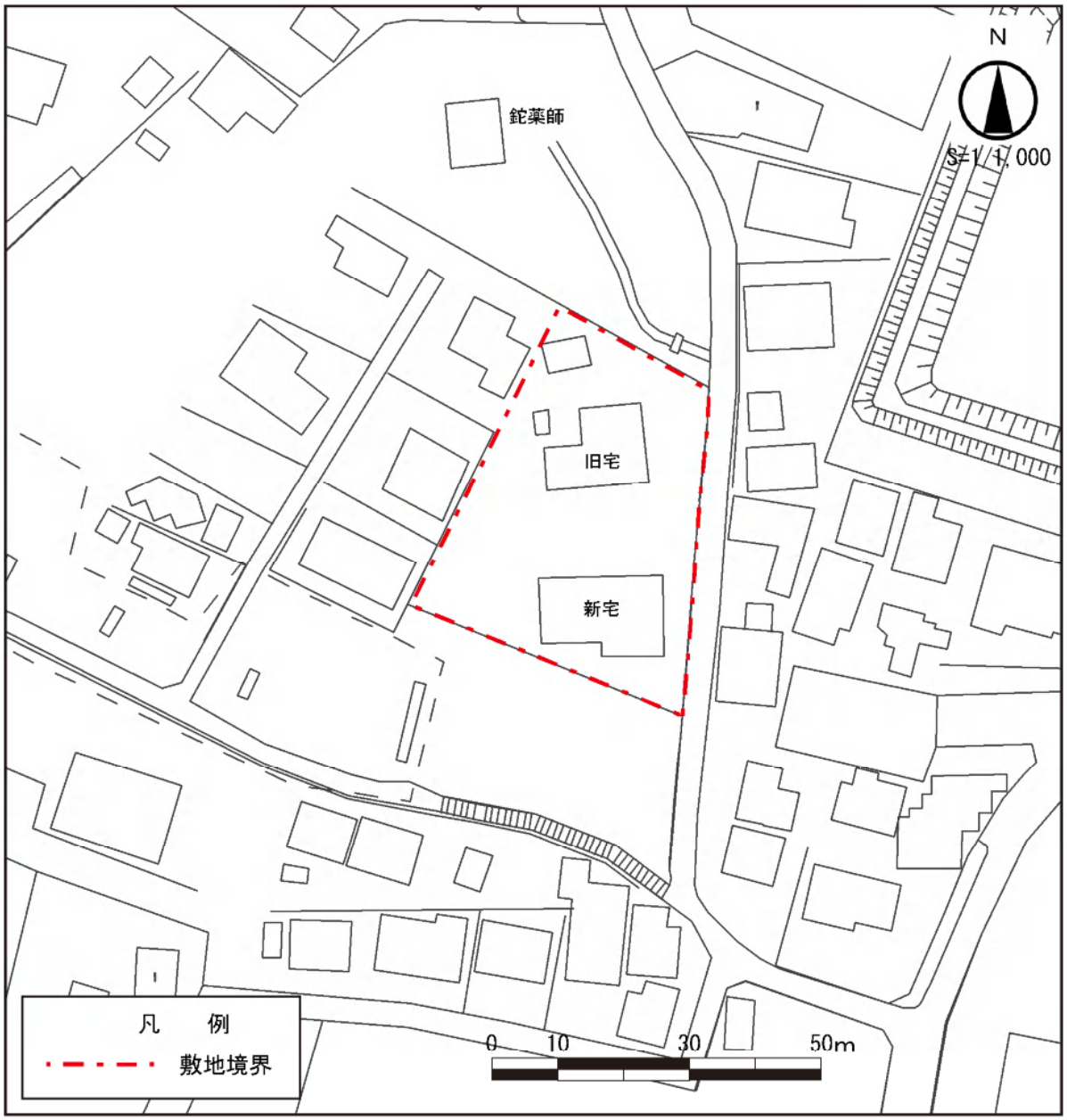
大正１０年(1921)	野口邸を建築

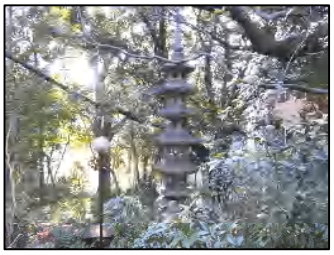
③特徴

- 清水組（現在の清水建設㈱）名古屋支店初代支店長であった野口長次郎の自邸として、清水組によって建築されたとのことです。
- 木造２階建の住宅で、屋根の赤い瓦は大正１０年当時に初めて製作に成功したフランス風日本瓦を使用しているとのことです。
- 戦後間もない昭和２０年～２１年に名古屋市の技監であった田淵寿郎（たぶちじゅろう）ら市の職員が寄宿し、名古屋市の戦災復興について議論していたとのことです。
- 石貼の門は、大正時代に名家に好んで使われた兵庫県のオオバク石を使用しており、建築当初からのものとのことです。
- 庭は高低差のある地形に、佐久島石、鞍馬石等の庭石のほか、五重塔、雪見灯籠、切支丹灯籠等が配置されています。これらの庭石、灯籠等は、建築時に尾頭橋の旧武家から買ったもので、牛で運んできたとのことです。

④現況

- 伊勢湾台風の被害で玄関屋根のフランス風日本瓦が破損しており、現在の青色の瓦で補修されています。また、窓枠は表側全てをアルミサッシに取り替えています。なお、現在は使われていないため、劣化も進んでいます。
- 庭の手入れにも資金・人手がかかり苦労しており、平成２０年頃に学生を呼んで庭の手入れとバーベキューをしたことがあるとのことです。
- 内部を使わせていただくことは難しいそうですが、今後お庭を地域の行事の場とすること等については、検討していただけるとのことです。




庭の五重塔

旧本宅外観

旧本宅外観

蔵

庭石

切支丹灯篭

(11)　西原邸

①建造物概要

名称：西原邸　　所在地：名古屋市千種区西山元町 1-65　　所有者：西原氏

建造年：大正 13 年

※敷地内には２棟の建物（住宅、旧幼稚園）があり、本調査では住宅を対象としています。

②沿革

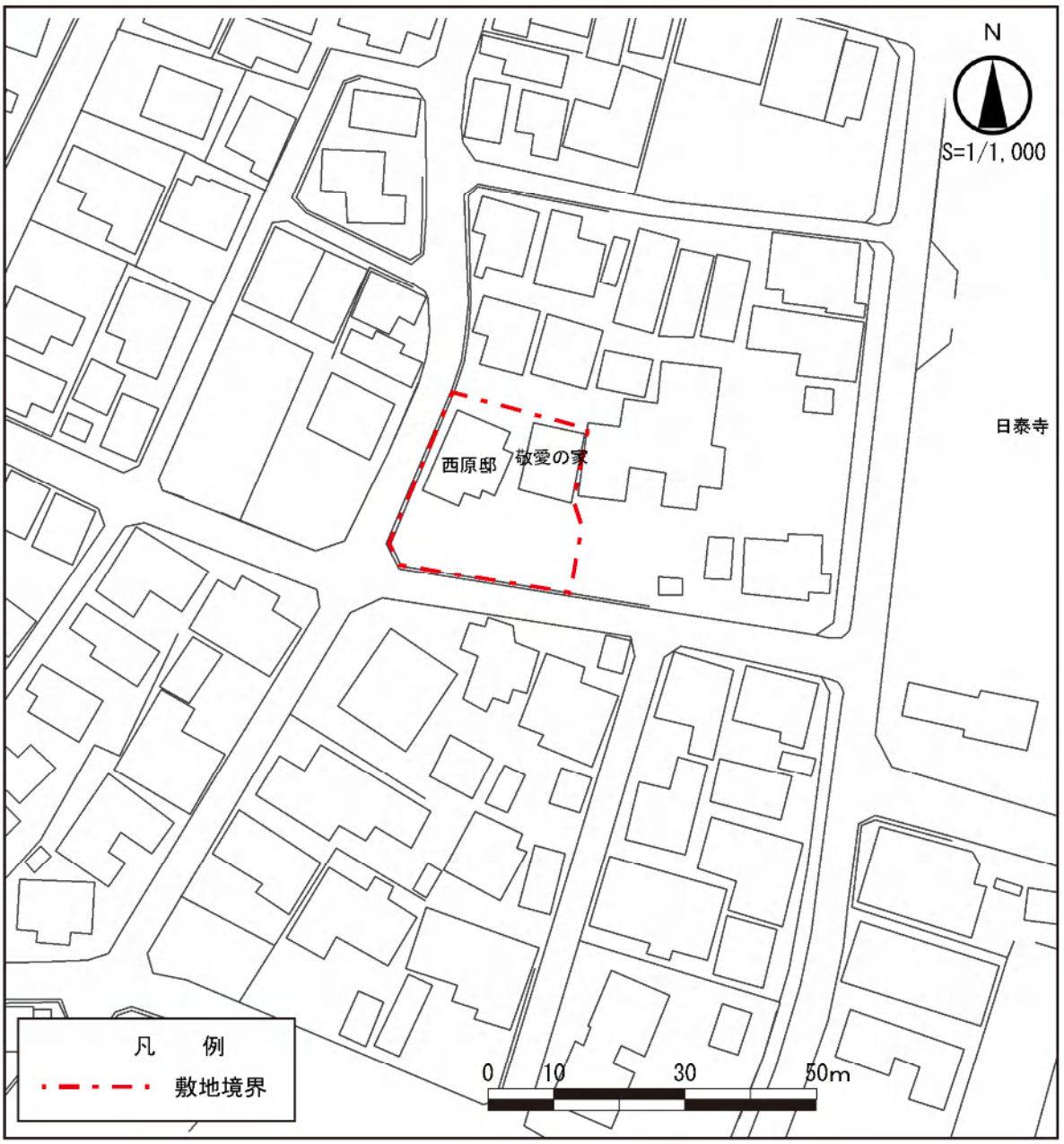
大正 13 年(1924)	西原邸を建築
昭和２１年(1946)	敷地内にて敬愛幼稚園を開園（平成１５年閉園）

③特徴

- 西原邸は、建築家西原吉次郎の設計による洋風建築の自邸です。西原吉次郎は多くの建物を設計しており、福岡県柳川市にある立花家の西洋館（国の指定名勝松濤園内）のほか、西尾市岩瀬文庫書庫、旧岩瀬文庫児童館（共に国の登録文化財）等があります。
- 西原邸がある地区は、「西山元町１丁目地区建築協定」が締結されています。
- 敷地内には、終戦の翌年（昭和２１年(1946)）から平成１５年まで「敬愛幼稚園」があり、その園舎は現在「敬愛の家」として貸室やフォトスタジオとして使用されています。
- 台所の天井が漆喰仕上げ、２階に茶室（４畳半・躙口有り）のある洋館は珍しいとのことです。
- 建物の土台は御影石でつくられています。
- 庭には多品種の椿が４０本ほどあり、西原氏一人の手で育てられています。花は４月いっぱいまで咲くそうです。

④現況

- 伊勢湾台風の被害のため、窓の修繕が行われたとのことです。
- 外壁は、元は茶漆喰仕上げ（淡い土色）でしたが、今はその上からボードを貼っているとのことです。
- 平成２３年４月以降、敷地南側の古い土留めを作りかえる工事を予定しています。工事に合わせて庭の一部が改修されますが、御影石造りの門及び貴重な植栽は残す予定とのことです。
- 現在西原邸は所有者の方の住まいとして使用されていますが、年１回程度、地域の方に内部を公開し、説明を行っているとのことです。
- 敷地内にある「敬愛の家」の１階は貸し出しをしており、地域の行事「やまのて音楽祭」のコンサートや講演会、その他の地域住民の活動の場として提供されています。



西原邸

玄関前のアーチ

敬愛の家

壁面飾り

庭の花

庭の花

参考　揚輝荘

①建造物概要

名称：揚輝荘（ようきそう）　　所在地：名古屋市千種区法王町２丁目　　所有者：名古屋市

建造年：（三賞亭）大正７年　（白雲橋（はくうんきょう））大正７年頃　（揚輝荘座敷）大正８年

（伴華楼（ばんがろう））昭和４年　（聴松閣（ちょうしょうかく））昭和１２年

②沿革

大正７年(1918)	三賞亭を茶屋町本家から移築改修。「揚輝荘」と名付ける
大正８年(1919)	揚輝荘座敷を矢場町五ノ切（現在の矢場町）から移築改修 この頃から茶会、園遊会、運動会をたびたび開催する
昭和４年(1929)	伴華楼を徳川家より移築（洋室をあわせて建築）
昭和１２年(1937)	聴松閣の建築
昭和２０年(1945)	空襲で建物の多くを失う。 聴松閣、米軍司令官用宿舎として接収される
昭和２７年(1952)	米軍接収返還される
昭和３６年(1961)	松坂屋の社員寮等として使われる（～平成２年）
平成１９年(2007)	揚輝荘の南園及び北園が名古屋市に寄贈され、一部暫定公開開始

③特徴

- 揚輝荘は、松坂屋の初代社長である 15 代伊藤次郎左衛門祐民氏の別荘として、大正から昭和初期にかけて建設された、名古屋の近代における郊外別荘の代表作です。起伏に富む広大な敷地に、池泉をめぐらすなど地形や周囲の自然を活かして造られました。
- 完成時（昭和１４年頃）には、約一万坪の敷地の中に三十数棟の各種建造物が建ち並び、池泉回遊式庭園とともに、覚王山の高台に威容を誇っていました。
- 現在は広大な敷地の大半が失われ、南園と北園に分断されているものの、主要な部分が残され、三賞亭、白雲橋、揚輝荘座敷、伴華楼、聴松閣といった複数の歴史的建造物が現存しています。
- 三賞亭、白雲橋、揚輝荘座敷、伴華楼、聴松閣の５棟が平成２０年(2008)に名古屋市指定有形文化財に指定されました。
- 三賞亭は煎茶の茶室です。庭園の池に面して石垣を積んだ上にある入母屋造り平屋の茶屋建築です。
- 白雲橋は、修学院離宮の千歳橋を模したといわれる廊橋です。両端に四阿（あずまや）を設け、南側の宝形屋根はやや小振り、北側の寄棟屋根は大振りになっています。
- 揚輝荘座敷は、伝統的和風建築です。

- 伴華楼は、建築家鈴木禎次の設計により、尾張徳川家ゆかりの座敷に洋室等を加えて建築された北園の中心的な建物です。上階に座敷をのせ、古代瓦を埋め込んだマントルピースを設けるなど、和洋折衷の室内意匠となっています。
- 聴松閣は、迎賓館として造られた揚輝荘を象徴する洋館です。山荘風の外観で、名古屋市内に設けられた洋館としては最大規模です。地階は鉄筋コンクリート造でインド風の意匠を持ち、地下トンネルへの入口があります。地上階は木造３階建で、イギリス、中国など各国風の個性豊かな空間が展開しています。
- 北庭１園は、京都の修学院離宮の影響を受けたと考えられる池泉（ちせん）回遊式庭園です。
- 南庭園は、松尾流宗匠の指導と考えられる回遊式枯山水石庭です。

④現況

- 現在、下記のような一部暫定公開を実施するとともに、随時コンサート、お茶会なども開催しています。

北庭園の暫定公開（無料）

休園日：毎週月曜日(月曜日が祝祭日または振替休日の場合は翌日)、
　　年末年始、イベント開催時等。

公開時間：午前９時 30 分から午後４時 30 分

ガイド付き建物見学（無料）

　北園の伴華楼内部と北庭園、南庭園のガイド付き建物見学を実施しています。電話にて事前予約をお願いします。ご予約は先着順でお受けいたします。

予約先：電話番号:052-759-4450（揚輝荘）
開催日：毎週水曜日、土曜日　１日４回(午前２回、午後２回)
定　員：各回 16 名まで

- 今後、修復整備を行い、市民共有の歴史・文化資産として保存活用事業に取り組みます。

昭和１４年頃（最盛期）配置図

現在の配置図